

平成 28 年度 大阪大学秋季卒業式・大学院学位記授与式

総長式辞

本日、大阪大学から学位を授与される学部生の皆さん、大学院生の皆さん、大阪大学総長として心からお祝いを申し上げます。皆さんは今、晴れやかで澄み渡った気持ちで本日の式典に臨まれていることと思います。この日を迎えるまでの皆さんの日々の研鑽とたゆまぬ努力を讃えるとともに、何よりも旺盛な勉学意欲に対して心から賛辞を送ります。

特に留学生の皆さんにとっては、母国を離れ、言葉や文化、生活や環境などが異なる日本で学業を修めることは並大抵のことではありません。それを成し遂げられた皆さんの強い精神力、そして異文化に対して協調していく能力の高さに敬意を表します。

さて、この大阪大学は、私が 30 年近くにわたって教育・研究に邁進してきました愛すべきホームグラウンドです。このように皆さんに語りかける機会をもてることを大変嬉しく、光栄に思っております。本日、私は皆さんに「ダイバーシティ」についてお話ししたいと思います。

今年の夏はリオデジャネイロでオリンピック・パラリンピックが開催され、母国の応援や選手の活躍に一喜一憂された方も多いのではないかと思います。その中でオリンピック・パラリンピック史上初めて「難民選手団チーム」が結成されたことを皆さんはご存知でしょうか。オリンピック・パラリンピックは、これまで「国や地域の代表」の参加が認められてきました。従って、内戦や政情不安などの理由で祖国を離れて他国で暮らすことを余儀なくされている選手には、参加資格がありませんでした。そのため、国際オリンピック委員会は今回、特別措置を設けて 10 人の難民選手がオリンピックに参加できるように計りました。

これは、国家レベルのダイバーシティの尊重の現われとも考えることができます。開催国のブラジルをはじめ、ドイツや各国が数多くの難民の救済、受け入れを積極的に行っています。そこには、単に人道的な立場からの支援というだけでなく、国家、国民、人種というこれまで障壁として感じていたボーダーを超えてグローバルな連帯意識が芽生えたことを意味しているように窺えます。

また、オリンピックと併せて行われたパラリンピックでは、今回のリオデジャネイロ大会には、160以上の国・地域から4,300人を超える選手が参加しました。障がいをもつ選手が自らの限界に挑み、技や肉体を磨き、競技に集中する姿には、オリンピックの力強さ、躍動とは違った応援と感動を呼び起こしました。

先日、パラリンピックのニュースを報じる読売新聞に次のような記事が掲載されており、大変印象に残りましたので、ここで原文のままでご紹介したいと思います。「パラリンピックの開会式は一つの主題を投げかけていた。障害というのは全ての人の中にある。その最大のものは『自分にできない』という心の障壁だ——」。そして、「真の障害とは、自分を枠にはめてしまう心そのもの。そして社会の制約だ。そういえば、私たちにも思い当たる。心の中に、現実を直視するつらさや寂しさを抱え、行動しないことの言い訳をし続けて来なかったか」。記事の紹介はここまでです。

事実、障がい者選手の多くが感じているのは、「人は誰でも病気や老いに直面する。そういう意味で私たちは健常者と大きな違いはない。だから今の自分たちに『できないことは何もない』」ということです。私は、このことを知りました時、ダイバーシティの考え方に関して非常に大切なことを学びました。それは、通常、健常者の立場から障がい者の方々を思うことにダイバーシティの意義を見出しがちですが、それは大きな誤りであり、本来は立場の異なる者同士が双方向で相手のことを思い遣ることに意義があるということです。

私は、先程、「難民選手団チーム」について話し、国家、国民、人種というこれまで障壁として感じていたボーダーを超えたグローバルな連帯意識が強化されていることを述べました。このことを別の角度から見ますと、国家のガバナンスによる安全保障の確立が難しくなっている中、個々人が背負っている民族、文化のダイバーシティを尊重しつつも、いかに連帯意識を醸成するかが重要な課題であり、その結果として、安全・安心を確保する動きが今後ますます重要になってきていると捉えることができます。

そこで、ダイバーシティを尊重する、つまり、一人ひとりの個性を尊重し、各人が有するかけがえのない価値が十分に活かされる社会、あるいはコミュニティを構築することが極めて重要です。その過程において相互の連帯感を高めて、近年多発している人間、社会、自然が複雑・高度に絡む深刻な問題の解決を図っていくことが求められます。

そのような動きを実現するコミュニティの代表として大学が考えられます。言うまでもありませんが、大学は多種多様な人たちが存在するグローバルな空間です。その空間において、ダイバーシティを尊重し、構成員一人ひとりが立場や利害を超えて力を合わせ、共通の新しい価値を創造し、未来を切り拓くオープンな場所でなければなりません。

そのため、大阪大学では、かねてより、高度な専門知識の獲得に加え、幅広い見識に基づく確かな社会的判断力としての「教養」、異なる文化的背景をもつ人と対話できる「国際性」、自由なイマジネーションと横断的な構想力としての「デザイン力」、これらを重視した人材育成を教育目標として、教育を実践してきました。

また、私が総長に就任しましてからは、「いま、個性は性を超える」を標語として男女が協力して働き、また、障がい者の皆さんが積極的にさまざまな企画に参画するダイバーシティに満ちた教育研究環境の実現を目指しております。

さらに、今後は、国際的な観点からのダイバーシティの実現も今まで以上に強力に推進したいと考えております。皆さんご存知のように、北大阪急行線の延伸に伴い設置される「(仮称)箕面船場駅」駅前に箕面キャンパスが移転します。その箕面新キャンパスについては、特に異文化が交流し、多言語が語り合われる高度にグローバル化された空間を構築し、ダイバーシティを強化するための先導的なキャンパスにしたいと考えております。

本日は、ダイバーシティについて、ジェンダーや障がいの観点から、また難民問題など国際的な観点からの重要性について指摘し、先導的立場である大学が今後担うべき役割について述べました。グローバル化が急速に進む社会においては、あらゆるシーンでダイバーシティの重要性は増す一方であると考えます。これから社会に出る皆さんには、改めてダイバーシティの意義を確認いただき、その関心をさらに高めていただきたいと思います。

最後になりますが、大阪大学で過ごされた皆さんには、是非、これまで積み重ねてきた学問、経験を大いに活かしていただき、皆さんがこの先、物事の本質、真の価値を見極め、母国や世界で活躍されることを切に期待いたします。

そして、この日まで長きにわたり皆さんの勉学と研究を支えてこられましたご両親、ご家族の方々には、深甚なる敬意を表しますとともに、心からお喜び申し上げます。そして、皆さんは、ここまでの長い道のりにおいて、家族、友人そして研究仲間、皆さんを陰で支えてきた大勢の人たちがいることを改めて噛みしめてください。その方たちへの感謝の念を忘れず、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、私の式辞といたします。本日は誠におめでとうございます。

2016年9月23日

大阪大学総長

西尾章治郎